幡陽小学校通信

幡多の太陽

令和元年10月29日　第13号

心が温かくなる光景

10 月 21 日、児童の登校時の出来事です。大岐の直線（安田光来君の自宅付近）を通っていました。わたしの前に 3 台くらい、後ろにも 2 台くらいの車が走っていました。よくこの辺りで、登校している 4 年の安田光来君と出会います。この日も前方の横断歩道の所にいる光来君の姿を見つけました。すると、わたしの前を走っていた数台の車が横断歩道のところで止まり、光来君を渡らせてくれていました。わたしを含め、後ろの車も停止しました。光来君は、渡り終わった後、止まってくれた車の方に向き直し、一台一台に、

「ありがとうございました。」

と頭を下げ、お礼を言っていました。8 台近くあった車の運転手さん一人ひとりに頭を下げお礼を言っていたのです。その中に、わたしがいたことに光来君は気づいていなかったようです。わたしは、この光景に出会い、心が温かくなりました。気持ちの良い朝を迎えることができました。

しおさい訪問　鼓笛隊演奏

10 月 16 日（水）に、しおさい訪問に行きました。この日は、しおさいの 10 月の誕生会の日でした。まず、3・4 年生の代表者が、10 月の誕生者にメダルをかけてあげました。みんな、喜んでくれました。

それが終わると、全校児童による鼓笛隊演奏です。会場にはたくさんの方がいらっしゃっていましたが、子どもたちは、堂々と演奏をすることができました。演奏曲がなじみのある曲ということもあり、口ずさんでいる方もいれば、手拍子をしてくれている方もいらっしゃいました。演奏が終わると、

「なかなか上手やったねえ。」

という声などが聞こえていました。このような活動を通して、子どもたちは心を大きく大きく成長させます。これからも続けていきたい取り組みの一つです。

11 月 4 日の大岐じんけんふれあい収穫祭、12 月 19 日の市社会福祉大会でも鼓笛演奏を披露する予定です。

防災教育　阪神淡路大震災体験談

10 月 23 日、大岐地区の近藤区長さんに学校に来ていただき、阪神淡路大震災の体験談を全校で聞きました。近藤区長さんは、阪神淡路大震災があった時、大阪の茨木市に住んでおられ、大阪の西淀川区に職場があったそうです。その時に、体験したことを児童にお話ししていただきました。体験者の生の声だったので、心に響いてきました。当時、わたしは黒潮町の伊田小学校に勤めており、学校のテレビで、あちこちで火事が発生し、神戸の街が炎に包まれている光景を見たことを今でも覚えています。

【近藤さんの話（一部）】

とにかく、情報がなかった。家に帰って、テレビを見て、知った。

家や家具の下敷きになり、そのうち、血が通わないために、壊死になって切断をした人もいた。家が火事になり、下敷きになっていた人たちが焼け死んだ。死者の発表数は時間が過ぎるとともににどんどん増えていった。助け出したいが助けられず、家族の目の前で亡くなっていった。水が出なかったために助けることができず、それを悔やんで心的病気になった消防士さんもいた。２０階建ての大きなビルが倒れていた。初めの地震では倒れていなかったが、その後の余震で横倒しに倒れた。1 階がつぶれた家が多くあった。車でみんなが移動するので、信号機も点灯していない、道路も通れなかったりして、車が集中した（渋滞で動けない）。緊急車両が通れないという状況であった。物資の輸送ができなかったので、食料品が入ってこなかった。水や食料が店になかった。

災害が起きると、まずライフラインの復旧を行った。電気を流すと倒れたままの家にも通電し、それが原因で火事が起きた。復旧のための通電による火事の発生が多くあった。たんすなどが倒れてきて亡くなった人が多くいたため、この震災後、たんすを置く場所が変わった。たんすからクローゼットになった。家具を固定するようになった。たんすの引き出しが飛び出さないようにカギをかけるようになった。ガラスの破片が飛び散らないようにフィルムを貼るようになった。高いビルなどは各階に避難スロープを設置するようになった。この地震を教訓に変わっていった。

危険のない場所に逃げることが大切です。そして、だんごむしの形になって身を守ることも大切です。でも、いちばん大切なのは、あきらめないこと、希望を持つこと、そして、生きようとする気持ちです。

台風や大雨のため、家族を亡くした方、家屋が浸水した方、育てていた農作物がだめになってしまった方…つらいと思いますが早く復興できることを願っています。